

ホーソンとロングフェロー—共栄の関係性

倉橋 洋子

はじめに

アメリカ文学が飛躍的に開花した19世紀半ばのアメリカン・ルネサンス期における代表的な散文作家、ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) と詩人、ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882) は、ボウディン大学の1825年卒業のクラスメートであった。しかし、大学時代においてホーソンとロングフェローは交流がなく、ホーソンが親しくしていたのは弁護士から海軍勤務となったホレイショ・ブリッジ (Horatio Bridge) や民主党の上院議員から大統領になったフランクリン・ピアス (Franklin Pierce) 等であり、彼らとは生涯交友関係にあった。ホーソンがロングフェローと交流を始めるきっかけは、ホーソンが短編集、『トワイス・トールド・テールズ』 (*Twice Told Tales*) を1837年に出版した直後に、当時弁護士であったブリッジの助言に従い、既にハーバード大学で教職に就いていたロングフェローに手紙を出したことにある。

ロングフェローはホーソンとブリッジの期待に応え、『トワイス・トールド・テールズ』の書評を書き、高く評価した。一方、その後ホーソンは、題材提供に係ったロングフェローの叙事詩、『エヴァンジェリン』 (*Evangeline*) が1847年に出版されると、書評で称賛した。彼らの作家としての表現方法は散文と詩で異なり、多くの批評家に指摘されているようにホーソンの作品には明るさと暗さが混在し、ロングフェローの詩は純粹で美しく、ロマンティックであるものの、彼らは互いに信頼し、作家として共栄した。彼らの交流は、1864年5月のホーソンの葬儀に際してロングフェローがエレジーを捧げるまで続いた。

ホーソンの交友関係においてブリッジやピアスは欠かせない存在である。また、作家ハーマン・メルビル (Herman Melville, 1819-1891) との交流もよく取り上げられる。しかし、職業作家としてホーソンが一步を踏み出す時期のロング

フェローの存在は無視できない。本稿では、作品の傾向は異なるものの、散文作家ホーソンと詩人ロングフェローがいかに作家として共栄の関係性を築いたかを、彼らの作家としての方向性や共有したものなどに視点をおき、ホーソンの大望や『トワイヌ・トールド・テールズ』と『エヴァンジェリン』の出版及びそれらの書評や手紙などを通して考察する。

I. ホーソンの大望

ホーソンはボウディン大学卒業前後から『ファンショー』(*Fanshawe*) や、3冊の短編集、「故郷の七つのテールズ」(“Seven Tales of My Native Land”)、「プロヴィンシャル・テールズ」(“Provincial Tales”)、「ストーリー・テラー」(“The Story Teller”)を出版する計画を立てて執筆を開始していた。当時、短編はテールズと言われていたために本の題にテールズが入っている。ホーソンの作家志望は、大学入学準備のためにメイン州のブルンズウィックに下宿していた時に、母親宛てた1821年3月13日付けの周知の手紙に書かれている。牧師、弁護士、医師になるつもりはないと述べた後に、「私が、ペンに頼って生計を立てる作家になることをどう思いますか。(中略) イギリス人の物書きの息子による最も誇るべき作品と同様に、私の作品が批評家によって褒められるのを見たら、お母さんはどれほど誇りに思うことでしょうか」と説得している(15: 139)。その一方で、「仕事に就かなくても生活するのに十分豊かだといいいのですが」と語り(15: 139)、家庭の経済状態や作家は経済的に恵まれないことも十分承知していた。

ホーソン一家は、船長であったホーソンの父親が黄熱病で1808年に亡くなってから母親の実家に身を寄せ、祖父母が1813年に亡くなると駄馬車屋を経営する叔父のロバート・マンニング(Robert Manning)がホーソンと姉妹の保護者になった。ホーソンの大学の費用は父親代わりのロバートを初めおじ、おばらが出した。そのような状況にもかかわらず、定期収入の見込めない作家を志望した理由は、母親宛ての手紙に示されているようにイギリス人作家と同様にアメリカ人作家として名声を博すという大望にあった。その背景には当時の読者や出版社がアメリカ人よりもイギリス人の書いたものを志向していたことがある。

このホーソンの大望は、ホーソンが1828年匿名で私費出版し、その後失敗

作のために回収して燃やしたと言われている最初の本、『ファンシヨール』では、「不滅の名声の夢 (dream of undying fame)」という具体的な言葉で表現されている (3: 350)。もっとも、『ファンシヨール』の主人公は「永遠の改善」をテーマに孤独な研究に没頭するも名声を博すことなく、若くして亡くなる。このファンシヨールの死に、ホーソンの大望に対する不安が描かれている。その不安は、ウッドソンも指摘しているように 1835 年に発表した「大望を抱く客」(“The Ambitious Guest”)でも描かれている (Woodson 77-79)。「大望を抱く客」では静かに暮らしていた一家が客を迎え入れて暖炉を囲み、皆がそれぞれの大望を語った後、皮肉にも裏山の岩が彼らの逃げた方向に崩れ落ちて全員亡くなる。

このように大望達成に対する不安はあったものの、若きホーソンは経済的に困窮する中で執筆活動か、生計のための収入獲得か、の葛藤において初心を貫き、執筆活動を選択した。例えば、歴史家で当時ボストン港の徴収官であったジョージ・バンクcroft (George Bancroft) の支援により、1839 年にボストンの税関に就職するも、石炭を測る税関での仕事は執筆活動と相いれない、と 1841 年に自ら辞した。ただし、1839 年 7 月 12 日付けのロングフェロー宛ての手紙によると、税関での仕事はポート・アドミラル (Port Admiral) のようで、時間にあまり拘束されないと思っていた (15: 287)。また、ソファイア・ピーボディ (Sophia Peabody) との結婚を控え、ホーソン自身も出資した自給自足の実験的な共同農場、ブルック・ファームに 1841 年に参加するも、ここでの仕事も執筆しようという気持ちを削ぐ、とホーソンは半年でそこを去った (15: 545)。ホーソンの執筆活動を優先した結果の経済的困窮は、1850 年に『緋文字』(*The Scarlet Letter*) をティクナー&フィールズ社から出版し、本格的な職業作家となるもそれ程改善されず、ピアスが大統領に就任し、1853 年にリヴァプール領事に任命されるまで続いた。その間、友人のブリッジから 1845 年に 250 ドル借りたり (16: 142n1)、1850 年にはロングフェローからは匿名で援助されたりした (Gale 288)。

生計よりも大望への道を優先するホーソンの現実に関われない自由な生き方は、大学時代にも表れていた。ホーソンは在学中に土曜日の夜に居酒屋に行き、宗教行事に参加せず、罰金を課されたことは周知のことである。大学や組織の規則に従うことよりも自分の気持ちを尊重するホーソンをバラキアンは、「税関

で働くことであれ、アレン学長の規則の基で生活することであれ、組織の決められた枠に自分を合わせる事が難しいと自分でも気づいていた」と分析している (Balakian 426)。¹ ホーソーンの生き方は、その後ロングフェローに「ホーソーンの男の美学と一風変わった独創的な空想力にますます感動した」と思わせるゆえんである (qtd. in Hawthorne 16: 183n4)

II. 『トワイヌ・トールド・テールズ』出版とロングフェローとの交流の始まり

現在も当時も本の出版は容易ではなく、特に読者も出版社もヨーロッパ志向であった19世紀前半には、出版社はアメリカ人作家による出版には採算を度外視しては踏み切れない状況にあった。加えて、新人作家の場合には販売の予測が困難なために特に厳しい状況にあった。『トワイヌ・トールド・テールズ』の出版も例外ではなく、困難をきわめた。ホーソーンは、原稿を送ってあった作家兼編集者のサミュエル・グッドリッチ (Samuel Goodrich) に本の出版について1829年12月20日付けの手紙で意見を求めた (15: 199)。グッドリッチは、『ファンション』の匿名の著者には「特別な力」があると認め、その著者をホーソーンと推測し、手紙を出していたという経緯がある (Goodrich 270)。ホーソーンの手紙に対する約1か月後の1830年1月19日付けのグッドリッチの返信には、「優しい少年」 (“Gentle Boy”) と「僕の叔父さんモリヌー」 (“My Uncle Molineaux”) が気にいったと書かれていた (qtd. in Julian Hawthorne 131)。また、グッドリッチはボストンに戻ったら「自分の影響力を使って出版社に動いてもらいます。出版社は成功の機会を与えるでしょう」と期待を持たせた (132)。

しかし、グッドリッチは編集者として務める『トークン』にホーソーン作品の一つを掲載するも、本としては出版しなかった。失意のホーソーンを見かねたブリッジが出版の損失を補償してようやく出版に至った。短編集は、『トワイヌ・トールド・テールズ』の題で、1837年3月7日にグッドリッチがディレクターを務めるボストンのアメリカン・ステーションナズから出版された。ホーソーンは『ファンション』の失敗から、既にアメリカ人作家の作品として評価されていたワシントン・アービング (Washington Irving) の『スケッチ・ブック』 (*The Sketch*

Book of Geoffrey Crayon, Gent., 1819-20) のように、アメリカの歴史やアメリカを素材にしたものを計画し、本の題もそれを表すものを計画していた。しかし、『トワイヌ・トールド・テールズ』に収録された作品は、必ずしもホーソンの希望通りにはいかず、アメリカを素材にしたものばかりではなかった。

ホーソンの作品を雑誌で読んでいたものの、交流のなかったロングフェローが『トワイヌ・トールド・テールズ』の書評を書くきっかけは、ホーソンが初めて手紙を送ったことにある。ロングフェローは1825年に大学を卒業すると、言語学研究のためのヨーロッパ派遣を条件に1829年から35年まで母校のボウデン大学で教鞭をとり、さらに、1836年には海外留学を条件にハーバード大学の教授職に就いた。またこのころから詩集の出版を始め、ホーソンより先に文壇にデビューしていた。ホーソンの1837年3月7日付けのロングフェロー宛ての手紙は、「拝啓」で始まり「敬具」で終わる正式なものである。1825年卒のボウデン大学のクラスメートとして出版社から『トワイヌ・トールド・テールズ』を送ることを伝えてから、同書に収録された作品は既に雑誌に発表されたものであるために「私の『二度語られた』退屈な物語でご迷惑をおかけしますことをお許してください (I can plead an absolute right to inflict my 'twice-told' tediousness upon you)」(傍点筆者)、とウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) の『ジョン王』(*King John*) の文言を言い換えた文の後に (15: 249n2)、「もっと互いによく知り合っていればよかったとよく後悔していました。それから、あなたの文学上の成功を喜んでおります」と伝えている (15: 249)。また、『トワイヌ・トールド・テールズ』を送ることで『海を越えて』(*Outre Mer*, 1835) を読んで楽しませてもらったことへの返礼としたい、とロングフェローの作品への敬意を表している。ホーソンの手紙は必要な情報がコンパクトにまとめられた丁寧な手紙である。

ロングフェローはホーソンの手紙に即座に応え、2日後にホーソンよりかなり長い手紙を送った。この時、ロングフェローは1831年に結婚した妻のメアリー (Mary) を流産で2年前に亡くし、人生の悲しみと孤独を経験したところであった。妻の死に関して手紙では「幾分暑さで喉が渇き、人生の雨でずぶぬれになったが、もっと悲しい変化をこうむりました」と間接的に告げている点に、「心

は南向き」と言いつつもまだ心の傷が癒えていないことが表れている (qtd. in Balakian 431)。そのような時期に雑誌で作品を読んでいた、志を同じくする同窓生から親しみのこもった手紙を受け取り、ロングフェローは嬉しかったにちがいない。ロングフェローはホーソーンの近況に関して触れ、ジャン・パウル・フリードリヒ・リヒター (Jean Paul Friedrich Richter) の『クインタス・フィクスラインの生涯』(*Life of Quintas Fixlein*, 1796) から引用した理想とする幸せな「暖かいヒバリの巣 (warm lark-nest)」に住んでいることを望むと気遣っている (431)。また、作品に関して、ロングフェローはこれまで読んだ中では、「七人の風来坊」(“The Seven Vagabonds”) の見世物師と「カンタベリー巡礼」(“The Canterbury Pilgrims”) のシェーカー教徒に興味を持った。「ストーリー・テラー」(“The Story Teller”) については、デビューに成功したストーリー・テラーと可哀想な牧師の対比を楽しんでいる。これらからロングフェローは、人間の心の闇を描いた作品にはあまり興味がないという印象を与える。手紙の最後でロングフェローは書評を書く予定を伝え、ホーソーンが『トワイズ・トールド・テールズ』の書評を期待して手紙を送ったことを察し、即座に期待に応えた。またホーソーンにも「書評を書きませんか」と勧めている (432)。手紙の結びの文で、「またすぐ便りを受け取り、他にどのような文学的計画を描いているか知りたいです」とホーソーンの執筆活動に関心を示している (432)。こうしてロングフェローは、ホーソーンの作家人生に理解ある同志として登場した。

上記のロングフェローの1837年3月9日付けの手紙に対して、ホーソーンは6月4日付けの手紙を送っている。近況に関して、ロングフェローが引用したジャン・パウルの表現が気に入り、それを言い換えて「フクロウの巣 (an owl's nest)」に住み、世間から遠ざかって生活していると返答している (15: 251)。また、1837年の初めにフランクリン・ピアスが、南海への探検隊にホーソーンが歴史家として参加するよう誘ったことの報告もしている。ホーソーンは「そのような職があれば引き受けます。一つの職に長く留まっていたましたが、いつも世界を回りたいと思っていました」と海外での新しい試みへの期待をヨーロッパ体験のあるロングフェローと共有すべく伝えている (15: 252-53)。ピアスの提案は、ホーソーン的环境変化に役立つと信じてなされた (Bridge 82)。ホーソーンが参加する気に

なった背景には、ブリッジがホーソンにピアスは上院議員に選出されたことと「いい友人」になり、「おそらく君のために何ができる」と告げていたこともある (Bridge 74)。もっとも、この時期の南海への探検計画は破綻し、1838 年再計画が立てられたが、『トワイヌ・トールド・テールズ』の成功もあり、ホーソンは参加しなかった。ホーソンにとってロングフェローは、友人であり、作家としての心中を察し、受け止めてくれる同志でもある。

Ⅲ. ロングフェローの『トワイヌ・トールド・テールズ』書評

ロングフェローの「空に新しい星が生まれた (a new star rises)」という文から始まる『トワイヌ・トールド・テールズ』に対する書評は、『ノース・アメリカン・レビュー』1837 年 7 月号に掲載された (Longfellow, "A Review" 59)。そこではホーソンを「天才 (a man of genius)」と呼び (59)、同書は散文であるが、「詩人によって書かれた」と指摘している (60)。さらに、詩的精神について「物質的世界と人間の魂の両者において自然との普遍的な共感 (a universal sympathy with Nature) を感じる事が詩的精神の高度な性質の一つである」と述べ、『トワイヌ・トールド・テールズ』の作者は詩的魂と同様に、「人間の普遍的な心や物事の普遍的な形式の中を住みか」としている、とホーソンに詩人としての要素があることを印象づけている (60)。

この批評から超越主義のエマソンが 1841 年に公表した「大霊」("The Over-Soul") で「知恵」に関連して詩人について述べたことが想起される。エマソンは、「世俗の知恵の多くは知恵ではない。人々の中で最も輝いている類の人たちは、間違いなく文学的名声 (literary fame) より優れており、作家 (writers) ではない」と述べたあとに続けて「あらゆる偉大な詩人の中に人間らしい知恵 (a wisdom of humanity) があり、それは彼らが行使するどのような才能 (any talents) より優れている」とし、「人間性はホーマー、チョーサー、スペンサー、シェイクスピア、ミルトンにおいて輝いている」と過去の偉大な詩人を評価している (288)。当時、評価されつつあった散文作家は、アメリカではワシントン・アーヴィングやジェイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper) などを除いて、まだ開花の途上にあった。そのような時期にロングフェローやエマ

ソンは、散文より詩を評価していたのではないだろうか。そのためにホーソーンを「詩人」と呼ぶことで、ロングフェローはホーソーンを評価したと考えられる。

また、ロングフェローは『トワイス・トールド・テールズ』を判断するには作家の「視点」を知るべきであり、そこから作品を見ると「楽しい微笑み (a pleasant smile)」や「悲しみの影 (a shade of sadness)」があるとホーソーン作品に描かれた明暗を読み取っている (62)。さらに、ロングフェローは作品のアメリカらしさの特徴を評価している。以下は、その箇所の引用である。

これらの物語の最も目立つ特徴の一つは、愛国的 (national) であることだ。著者は賢くもニューイングランドの伝統の中からテーマを選んだ。「我々が王のもとで暮らしていた古き良き植民地時代」のくすんだ伝説を。これは物語に相応しい素材である。古い、今にも崩れそうな伝統からテールズを制作することは、古い尖塔から出てきた杖やカギタバコ入れ、あるいは偉大な人々により植えられた木々同様、当然のことであろう。ピューリタンの時代は距離をおいてみるとロマンティックに見え始める。(62-63)

ロングフェローは作品のテーマが「ニューイングランドの伝統」にあることを鋭く捉えて評価した。ホーソーンが『ファンショー』の失敗以後、アメリカの歴史等を題材とした短篇を書き続けてきたことが報われた。ロングフェローが、ホーソーン作品をこのように理解した背景には、彼自身が1820年に『ポートランド・ガゼット』で最初の愛国的で歴史的な詩、「ラヴェルポンドの戦い」(“The Battle of Lovell’s Pond”)を公表していたことがある。ホーソーンとロングフェローの共通点がここに見出される。もう一つのホーソーンの特徴としてロングフェローが挙げたことは、文体の美しさである。ホーソーンは言葉を「踏み石」のように使用し、気持ちの水のように流れていると解説し、明るい、詩的な文体の例として「泉の幻影」(“The Vision of the Fountain”)を挙げている (63-64)。

ロングフェローの書評をエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) のそれと比較すると、いかにロングフェローの書評が好意的であるかがわかる。ポーは、1842年にジェイムズ・マンロー社から出された『トワイス・トールド・

テールズ』の2巻本に対して『グラハムズ・マガジン』に書評を書いた。ポーは、ホーソンの作品はすべてがテールズではなく、多くは「純粋なエッセー」であるとし、「尖塔からの眺め」(“Sights from a Steeple”)や「日曜日に、家にて」(“Sunday at Home”)等10編を挙げている。もっともこのうち6編は第2巻に収録されたものである。ポーはこの書評を利用して当時テールと呼ばれていた短編の定義を行った(298)。また、アーヴィングとの関連について、「ホーソンのエッセーは、アーヴィングの性質の多くが見られる。より多くのオリジナリティがあるが、あまり洗練されていない」とも述べている(298)。しかし、ホーソンの文体は「純粋」で各ページに「高度なイマジネーションのひらめき」があり、ホーソンは「真の天才だ(a man of truest genius)」と締めくくっている(300)。ポーの書評が称賛と批判が混在していることに対して、ロングフェローの書評はホーソンのために書かれたものであるとの印象を与える。もっともポーは第1巻に収録された作品を比較的称賛している。²

ホーソンはロングフェローの書評を読んで、「率直に告白すると『トワイストールド・テールズ』に対してこのご親切な仕事をしてくださるとの希望がなかったわけではありません」と感謝の気持ちに溢れた1837年6月19日付けの令状を送った(15: 255)。ロングフェローはホーソンが文壇デビューする重大な時期に期待通りに応えてくれた人物である。また、ロングフェローは1839年5月、ニューヨークの出版社のサミュエル・コルマン(Samuel Colman)に「将来文学界において高い評価を得る」ホーソンが、ロングフェローの『ハイパリオン』(*Hyperion*)と同じ条件(500部の印刷で、375ドルの支払い)でテールズ2巻本の出版を希望している、と仲介の労をとった(*The Letters* 2: 148)。同社は倒産したために実現に至らなかった。さらに、1843年3月19日付けのロングフェローからホーソン宛ての手紙では、「痣」(“The Birth-mark,” 1843)を楽しく読んだことを告げつつ、「短編(short story)ではなく、それをロマンス(Romance)にすべきである」と長編に挑戦することを勧めている(*The Letters* 2: 519)。ホーソンの長編は、『緋文字』が1850年に出版されるまで待たねばならないが、ロングフェローの助言は時期を得ている。『緋文字』が出版された時、1851年8月8日付けの手紙でロングフェローは「私はロマンス作家としてあなたの成功を予言

した真の予言者だった」と語った (*The Letters* 3: 306)。そのようなロングフェローのことをホーソーンは、1843年5月3日付けのブリッジ宛ての手紙で「君を除いて、ロングフェローは私が今本当に好きな唯一の大学の知り合いだ」とその時の正直な気持ちを告げている (15: 688)。なお、『トワイヌ・トールド・テールズ』を評価した人たちの中には、ロングフェローをはじめ、ホーソーンの義理の姉になるエリザベス・ピーボディ (Elizabeth Peabody) もいた。

IV. ホーソーンの『エヴァンジェリン』書評

ロングフェローの六歩格の長詩、『エヴァンジェリン』が1847年11月に出版されると間もなく、『『エヴァンジェリン』の詩としてのメリット、ストーリーにおける歴史的事実とロングフェローの情報源に関して』かなりの議論が起こった (Hawthorne and Dana 200)。それは、ロングフェローが出版する前に、キャサリン・アーノルド・ウィリアム (Catherine Arnold William) が1841年に『中立のフランス人、あるいはノヴァ・スコティアのエグザイル』 (*The Neutral French, on the Exiles of Nova Scotia*) を出版するなど複数のアカディアンに関する本が出版されたことが原因とみられている。情報源等に関しては、ホーソーンが深くかかわっていた。直接の情報源はホーソーンのまたいとこ、スーザン・インガルソン (Susan Ingersoll) の養子で当時エписコバル協会の牧師であったホレス・ロレンゾー・コノリー (Horace Lorenzo Conolly) である。コノリーはフランス系カナダ人から聞いたアカディアの若いカップルの別離の悲話を1835年にホーソーンに伝えた (Hawthorne and Dana 170-71)。その内容は『アメリカン・ノートブックス』に記されている (8: 182)。コノリーによると、ホーソーンはいい話だが、「書く気分にはならない。強い光や深い影がない (“It is not in my vein: there are no strong lights and heavy shadows.”)」と答えた (Hawthorne and Dana 171)。アメリカの歴史、風土を素材にした作品を心掛けてきたホーソーンにとって、アカディアの歴史は作品の素材として魅力的ではある。しかし、ホーソーンは変わらぬ愛よりも人間の心の闇に魅かれていたのではないだろうか。その2、3年後にロングフェロー宅にホーソーンが招待され、コノリーを連れて行った時に、ホーソーンとロングフェローはアカディアの悲話を共有することに

なった。

その後、ホーソンはコノリーから聞いた話をもとに、『昔の名高い人々』(*Famous Old People*)の1841年版に「アカディアン・エグザイル」(“The Acadian Exiles”)を入れた(Hawthorne and Dana 173)。ここでは、語り手のおじさんが1775年のフレンチ・インディアン戦争を契機に英国がアカディアに住む7,000人のフランス系住民を強制移住した歴史を基に語っている。語り手のおじさんは話の後で、「流浪者は英国の州で年を取り、アカディアを二度と見なかった。子孫は今日私たちの中に残っている。彼らは先祖の言語を忘れてしまい、おそらく彼らの不幸に関する伝説を保持しないだろう」とアカディアンの文化的保存を悲観的に捉え、「思うに、もし私がアメリカ人の詩人なら、詩の主題としてアカディアを選ぶだろう」と言っている(6: 129)。この詩人とは、コロニーから一緒に話を聞いたロングフェローを示唆し、ホーソンは散文として「アカディアン・エグザイル」を書いたので、今度は詩という表現形式でロングフェローが書くことを勧めている。ホーソンは1841年にこの『昔の名高い人々』をロングフェローに送った(Hawthorne and Dana 173)。

ロングフェローは、その後アカディアンの歴史を調べ、再びホーソンとともにコロニーから話を聞き、『エヴァンジェリン』を出版した。同書の完成が間もない1847年1月21日付けの手紙でロングフェローは、ホーソンに詩の一部を読むから聞いてほしい旨を伝えた(qtd. in 16: 198 n3)。ホーソンはそれに応えて1月23日付けの手紙で「詩が間もなく完成すると聞いて嬉しいです。必ず出かけてあなたが読まれるのをお聞きします」と返事を書いている(16: 197)。このロングフェローの依頼は、『エヴァンジェリン』に関してホーソンに「多大なる恩義があること」を思い出したからであると分析されている(Hawthorne and Dana 190)。

ロングフェローの『トワイヌ・トールド・テールズ』の書評に対する返礼としてのホーソンの書評は、1847年11月13日コロニーが編集していた『セイラム・アドヴァイザー』に匿名で掲載された。ホーソンは、『エヴァンジェリン』のテーマ、英国により別々の場所に強制移住され婚約者と生き別れになったエヴァンジェリが、恋人を捜してアメリカ中を髪が白くなるまで捜し、ついに見つけた時

には恋人は貧民院で死の床にあったことを語った後に、作者について触れている。以下は書評からの抜粋である。

それは実に憂鬱や意気消沈のみを引き出す普通の作家の手に任せられないテーマである。そのテーマは、ここで我々が美しく照らされた悲哀を見出しているように、我々に提示するには真の詩人の深い洞察力を必要としていた。そのために詩の印象は、どこにも陰惨さも失望もなく、貧者の死の床は、少しも期待していなかった純粋な日の光 (the purest sunshine) で輝いているというものである。(23: 247)

ホーソーンが指摘しているように死の床の「日の光」は、『エヴァンジェリン』を悲惨さから免れさせる救いを示唆している。この場面は『緋文字』における森のパールの描写を想起させる。薄暗い森の中で、パールは「日の光 (a ray of sunshine)」で輝いていた (1: 208)。ホーソーンが森のパールを描く時に、ロングフェローの詩から受けた印象が蘇ったのではないだろうか。さらに、ホーソーンは書評においてロングフェローが「自分の力で勝ち得た名声 (well-earned fame)」があることを指摘しているが (23: 248)、これはホーソーンが若い頃から望んできたことでもある。また、詩が「アメリカの歴史に基づき、アメリカの生活や風習を具現している」と認めているが (23: 248)、これはロングフェローが『トワイス・トールド・テールズ』におけるホーソーンの特徴として認めたことでもある。結局、ホーソーンの望んできた名声の獲得と作品のテーマとしての目標が、ロングフェローと『エヴァンジェリン』に達成されている、とホーソーンは認めている。ロングフェロー自身も同書は「おそらくよりしっかりした足場 (a firmer foot-hold)」を与えてくれ、ビジネス的にも成功したと語っている (*The Letters* 3: 169)。その後、『エヴァンジェリン』はロングフェローの生涯で最も有名な作品となり、世界中で翻訳された。

ロングフェローの『エヴァンジェリン』が1847年に出版された後の1851年にティクナー&フィールドから『昔の名高い人々』が再版された時に、ホーソーンは「おじいさんがこれらの言葉を最初に語ってから [1841年版のこと]、アメリカ

の最も有名な詩人はエヴァンジェリンの美しい詩により、私たちのみんなから優しい涙を引き出してきた」という文言を追加した（6: 129 カッコ内筆者）。最も有名な詩人とは、ロングフェローのことである。ここでもホーソンはロングフェローの詩が感動を与えてきたことを指摘している。

ロングフェローは、1847年11月29日付けの手紙でホーソンに「私のこの成功は、多くの人が詩と受け取るであろう散文を書く楽しみをすすんで譲ってくれ、多くの人が散文と受け取るであろう詩が書けたのは、全くあなたのお陰です」と『エヴァンジェリン』の素材を譲ったことに対する感謝を述べている（*The Letters* 3: 146）。また、1848年2月8日付けの手紙でもロングフェローは、ホーソンがエヴァンジェリンを譲ってくれたことにお返ししがたく、文学的計画が浮かんだと書いている（*The Letters* 3: 158）。ホーソンとロングフェローは協働して文学作品を発表する計画を他にも立てたが、いずれも実行には至らなかった。ホーソンとロングフェローの友情は、『ウィリアム・テル』（*William Tell*, 1804）の素材をフリードリヒ・フォン・シラー（Friedrich von Schiller）に渡し、シラーの作品を褒めたヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）とシラーのようだと言われている（Hawthorne and Dana 200）。

おわりに

ホーソンが亡くなる約5か月前の1864年1月2日付けのロングフェロー宛ての手紙で、ホーソンは最後の本を書いているものの完成するかどうかかわからないが、断念せざるを得なくてもがっかりしないと述べた後で、「文学的評判を得るよりも価値のあることがあるかどうか、また最高傑作が古くなった時に実体があるかどうか、私よりはるかによくご存知でしょう」と締めくくっている（18: 626）。ホーソンは死を意識した時に、あらためて若いころの大望への希求に思いをはせ、また自分の作品の永続性への危惧を、志を同じくするロングフェローにだからこそ語った。ホーソンは生涯大望に囚われていたのだ。両者の作品は年月が経った現在も価値があり、ホーソンは若い頃からの願望通りにアメリカ人作家として名声を博し、大望を果たした。

ホーソーとロングフェローは、散文と詩という表現方法や作品の趣が異なるものの、ホーソーはロングフェローの詩の美しさに、ロングフェローはホーソーの才能に魅かれ、交流を続けた。彼らは作品の素材や目標を共有し、互いに支え合い共栄の関係性を築き、アメリカン・ルネサンス時代の作家としてアメリカの知的独立に貢献した。

注

本稿は2020年12月26日、日本ナサニエル・ホーソー協会中部支部研究会にて口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

1. このようなホーソーの生き方は、1982年夏まで埋もれていたホーソーが姉のエリザベス(Elizabeth)に宛てた1821年10月28日付けの手紙に如実に示されている。ホーソーは、大学生活で「最悪なこと」は、毎週日曜日に会合に行き、学長、あるいは他の人の「カルヴィニストの熱烈な説教」を聞くことを強いられることであると書いている(15: 159)。また、聖書の授業では他大学にはないような祈りの後に聖書の言葉の暗唱があるが、それは「きわめてばからしいものだ(a very foolish one)」とも述べている(15: 160-61)。
2. 『トワイヌ・トールド・テールズ』は1842年に2巻本にして出版された。第1巻は1837年版に「橋番人の一日」(“The Toll-gatherer’s Day”)を追加し、第2巻は新たに選択された作品が収録された。ポーが取り上げて称賛した作品は第1巻に収録されたものがほとんどで、「アメリカ人として『トワイヌ・トールド・テールズ』を誇りに思う」と言っている(299)。問題は、第2巻収録の「ハウの仮面舞踏会」(“Howe’s Masquerade”)には、ポーの「ウィリアム・ウィルソン」(“William Wilson”)との類似点があると例を挙げて論じていることである(299-300)。しかし、「ウィリアム・ウィルソン」は1839年に公表されたが、「ハウの仮面舞踏会」はそれより早く1838年に雑誌に公表されていた。ポーは勘違いしたようだ。

引用文献

- Balakian, Peter, editor. "Two Lost Letters: Hawthorne at College; Longfellow and Hawthorne: The Beginning of a Friendship." *The New England Quarterly*, vol. 56, no. 3, 1983, pp. 425-432. JSTOR.
- Bridge, Horatio. *Personal Collection of Nathaniel Hawthorne*. Harper & Brothers Publishers, 1893. HathiTrust Digital Library.
- Emerson, Ralph Waldo. "The Over-Soul." *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson: Essays*, 1st series, vol.2, Houghton, Mifflin, 1903-04. pp. 265-97. University of Michigan Library, 2006.
- Gale, Robert L. *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia*. Greenwood Press, 1991.
- Goodrich, Samuel G. *Recollections of a Lifetime, or Men and Things I Have Seen: In a Series of Familiar Letters to a Friend, Historical, Biographical, Anecdotal, and Descriptive*. Vol 2, Miller, Orton and Mulligan, 1856. Yale University. HathiTrust Digital Library.
- Hawthorne, Julian. *Nathaniel Hawthorne and His Wife: A Biography*. Vol.1, Archon Books, 1968.
- Hawthorne, Nathaniel. *The American Notebooks. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, edited by Claude M. Simpson, vol. 8, Ohio State U., 1972.
- . *Fanshove. The Centenary Edition*, edited by William Charvat et al., vol. 3, 1971, pp. 331-460.
- . "Famous Old People." *The Centenary Edition*, edited by William Charvat et al., vol. 6, 1972, pp. 69-139.
- . *The Letters, 1813-1843. The Centenary Edition*, edited by Thomas Woodson et al., vol. 15, 1984.
- . *The Letters, 1843-1853. The Centenary Edition*, edited by Thomas Woodson et al., vol. 16, 1985.
- . *The Letters, 1857-1864. The Centenary Edition*, edited by Thomas Woodson et al., vol. 18, 1987.
- . *Miscellaneous Prose and Verse. The Centenary Edition*, edited by Thomas Woodson et al., vol. 23, 1994.

- . *The Scarlet Letter. The Centenary Edition*, edited by William Charvat et al., vol. 1, 1962.
- Hawthorne, Manning & Henry Wadsworth Longfellow Dana. "The Origin of Longfellow's 'Evangeline.'" *The Papers of the Bibliographical Society of America*, vol. 41, no. 3, 1947, pp. 165-203. JSTOR.
- Longfellow, Henry Wadsworth. "A Review of Twice-Told Tales." *North American Review*, vol 45, no. 96, 1837, pp. 59-73. JSTOR.
- . *The Letters of Henry Wadsworth Longfellow*. Edited by Andrew Hilen, vol.2, The Belknap P of Harvard UP, 1966.
- . *The Letters of Henry Wadsworth Longfellow*. Edited by Andrew Hilen, vol.3, The Belknap P of Harvard UP, 1972.
- Poe, Edgar Allan. "Twice-Told Tales by Nathaniel Hawthorne." *Graham's Magazine*, vol. 20, 1842, pp. 298-300. Internet Archive.
- Woodson, Thomas. "Hawthorne and the Author's Immortal Fame." *Nathaniel Hawthorne Review*, vol. 30, no. 1/2, Special Bicentennial Issue 1804-2004, 2004, pp. 56-91.

キーワード：ホーソーン、ロングフェロー、共栄、散文、詩
(くらはし ようこ 東海学園大学名誉教授)